

INTERVIEW

同志社人 訪問



「山野はるひさん
〔神学部4年次生〕」

「内田誠さん
〔1991年神学部卒業〕」

日産自動車株式会社 社長兼最高経営責任者(CEO)

内田 誠さんに聞く

2019年12月、日産自動車の社長兼CEOに就任、
新生日産を牽引する内田誠さんに、同志社大学 神学部の後輩
山野はるひさんがインタビューしました。

海外の学校での生活は カルチャーギャップの連続

山野 幼少時代、海外で過ごされたそうですね。どのような学校生活を送られていたのでしょうか。

内田 父の仕事の関係で小学校1年から5年までエジプトに住み、カイロの日本人学校に通っていました。教員含め20人ほどの小さな学校で、家族的な雰囲気がありましたね。その後帰国し、大阪のマンモス校に入学。中学2年からはマレーシアに住み、英語を必死で覚え、インターナショナルスクー

ルに入学しました。その頃、日本人はまだ珍しい存在で「なぜ、ちょん曲げをしてないんだ」なんて言われるような世界(笑)。なんとか周りに溶け込みたくて、アメフト部に入り友人を作りました。そして高校2年の終わり頃に再び日本へ。帰国子女を受け入れていた同志社国際高校に入学しましたが、ブランクが長かったせいで、今度は日本語がままならない。入学試験で初めて漢文を目にして「日本なのになぜ中国語が出るのか」と先生に質問したのを覚えています。

山野 そんな紆余曲折があったとは驚

きです。その後、同志社大学神学部に入學されたのは、海外経験が影響しているのでしょうか。

内田 そうですね。マレーシアのインターナショナルスクールにいた時です。「おまえの宗教は何だ」といきなり友人に聞かれ、なぜそんなことを聞くのだろう、と不思議に思ったのです。自分は仏教だけれども宗派を知らない、知見がないから説明もできない。その頃の自分にとって、宗教はとても希薄なものでしたから。けれども、世界には宗教を大切にする文化があり、生活や人生についてまわるものなのだな、



「自分らしさ」を見つけ、磨きをかける
大学はそれができる場所です

今回の同志社人

内田 誠さん 【1991年 神学部 卒業】

うちだ・まこと 1966年生まれ。大学卒業後、日商岩井（現双日）に入社。2003年に日産に中途入社、アライアンス共同購買部門に配属。新興国向けブランド「ダットサン」の収益管理責任者などを経て2016年常務執行役員。2018年専務執行役員。東風汽車有限公司総裁として中国事業を率い、2019年12月から現職に。小学校時代はエジプト、中高時代はマレーシアで過ごす。

と。その時の気づきが、宗教や神学の関心につながったのだと思います。

1ドル紙幣が教えてくれた アメリカという国の課題

山野 神学部の授業で印象に残っていることはありますか。

内田 「キリスト教と現代社会」の授業が面白かったですね。印象的だったのは「1ドル紙幣の裏に描かれた未完成のピラミッドと目は、アメリカ社会を象徴している」という話です。大国アメリカは、まさに未完のピラミッド。共通の何かを媒体として人を繋げないと、一方向に進まない国です。そして、人を繋ぐための共通媒体が目、つまり「宗教」。それは、大統領のスピーチに聖書の引用が多いことにもつながっていると。「ああ、そういうことなのか」

と感動しましたね。講義の中の15分ほどの話でしたが、今でも鮮明に覚えています。



37歳で新たなチャレンジ 商社を飛び出し、日産へ

山野 「牧師よりサラリーマン」という当時の新聞記事を拝見しました。この頃は、神学部卒業生のほとんどが牧師になられたのですね。

内田 そうです。就職は少数派でした。企業の面接で、自分が神学部出身だと話すとすごく不思議がられましたね。

山野 数ある業界の中から商社を志望された理由を教えてください。

内田 世界を相手にダイナミックな仕事をしたいという強い思いがあり、商社を選びました。実は最初、証券会社を志望していたのです。「ウォール街」という映画を見て証券会社もいいな、と。けれども証券会社の方から「君がやりたいことは商社だ」とアドバイスを受けまして（笑）、それからは商社一本に絞って就職活動。日商岩井（現双日）に入社しました。

山野 商社から日産へ転職されたきっかけは何だったのでしょうか。

内田 商社の仕事に不満があったわけではないです。当時、インターネットが急速に普及し、商社業界は大きな変革期を迎えていました。何かもう一回やるなら今しかないな、と。日商岩井でフィリピンに5年間駐在し、三菱自動車のオペレーションに携わり、より深く自動車産業に関わりたいと思ったことがきっかけです。また、飛躍的な成長を遂げていく日産にも魅力を感じ

ました。ルノー・日産がスキームとして進めていた共同購買事業に興味を持ち、面白そうだなと思ったのです。それで一般公募を受け、2003年に入社しました。37歳の時です。

山野 ヘッドハンティングではなく、ご自身の挑戦だったのですね。

内田 そうです。転職からこれまでの経緯を話すと皆さん、とても驚かれます。

どんな時も、どんな意見でも聞く努力をすることが大切

山野 私はサークルのリーダーをしていた時、人をまとめる難しさを痛感しました。グローバルな組織を束ねる企業のトップとして、リーダーシップについてどうお考えですか。

内田 日産には、トランスパレンシー（透明性）、リスペクト（尊敬）、トラスト（信頼）というキーワードがあります。私は、この言葉を自分の信条として動いてきました。ビジネスを成功させる上でも、上司と部下の関係性においてもこの3つは非常に重要です。まず、透明性を持つものごとを共有する。それは自分自身をさらけ出すことでもあります。その上で、相手の思いや立場を尊重する。そうすることで始めて信頼関係が生まれます。リーダーシップとは、信頼を築くことであって、周りの人に「この人と一緒にやっていきたい！」と思ってもらいたいのだと考えています。それができる人は魅力があり、リーダーとして力を発揮できる人間だと思うのです。

山野 一緒にやっていきたいと思ってもらおう…そのためには何を心掛ければよいのでしょうか。

内田 人の話を聞くことが一番大事です。それはビジネスもサークルも一緒です。例えばサークルの中で、早く結論を出さなければならない時、リーダーは、周りの意見を十分に聞いているでしょうか。忙しい時や早く進みたい時、イエスカノーかを聞き、急いで結論を出して、論議をおろそかにしがちですが、それは一番よくないことです。忙しくても、難しい状況であっても、常に現場の意見を聞く努力をし

なければならない。そのために自分の「聞く」キャパシティを広げておくことが必要です。そして、ガイド役となつて、その意見に対し、言うべきことを言い、進む方向をはっきりと示す。それが、私が考えるリーダーシップなのです。

順応力と英語力は海外経験で培った「強み」

山野 これまでの経験で培われた自身の強みは何でしょうか。

内田 様々な変化に対する順応性です。これは、幼少時代の海外経験が大きいですね。その時々や環境や文化に自分が順応しなければ、学校の仲間とうまくやっていけませんでしたから。今も社会人として、どんな状況に置かれてもフレキシビリティを持って対応していく自信があります。英語力も強みです。英語は、グローバル化時代の重要なツール。日産の経営会議はすべて英語です。インターナショナルスクールでは苦労しましたが、体で覚えたものはしっかりと染みついている。自分の「今」を作っている、一つの要素になっています。

誰にも負けない部分を磨き「自分らしさ」を作る

山野 これからの社会に求められる人材とは？また、どんな能力が必要なのでしょうか。

内田 社会に出ると「自分らしさ」と

いうものが非常に重要になります。ですから、学生の皆さんには語学でも部活でも趣味のことで何でもいい、誰にも負けない「これだ！」というものを見つけて、磨きをかけてほしいと思います。会社というのは、状況の変化や様々な困難を乗り越え、常に成長し続けなければなりません。そのためには多様なアイデアが必要で、人と違った強みを持つ、様々なタイプの人材が求められます。会社としてもそうした人材を資産として育てていきたいのです。また、自分らしさをアピールできる人は、非常に魅力的です。自由な時間が持てる学生のうちに、ぜひ自分らしさを見つけてください。磨いてください。同志社大学には、自分らしさが育つ環境と自由な風土があるのですから。



インタビューを終えて



インタビューー
山野 はるひ さん
【神学部 4年次生】

やまの・はるひ 京都府出身。一神教を通じて、世界にある様々な考え方を知りたいという思いから神学部に入部。3年次から小原克博教授のゼミに所属。自然が好きで環境問題に関心を持ち、ゼミでは科学技術と自然観の関係について研究。サークルはギタークラブに所属、リーダーを経験。

内田社長は、柔らかな雰囲気があり、誰に対しても同じ目線で接してくださる方という印象を持ちました。一学生の私の言葉も真摯に受け止めていただき、感動しました。特に心に響いたのは「人の話を聞くことが一番大事」というメッセージです。現場の様々な人の意見を聞き、それを積み重ねて、よりよいものを創るという考えは、素晴らしいと思いました。私は、来年から社会人になります。社会に出ると、これまでとは違う様々な人と関わっていくことになります。そんな中で、どんな方の意見もしっかり聞けるよう、自分のキャパシティを広げる努力をしていきたいと思っています。